

いつからかゲリラ豪雨に名を変えて夕立の顔
 険しくなりぬ

(前橋市) 坂本ひとみ

息子らの高麗川、吾の長良川泳ぎを習ひし故郷の川

(坂戸市) 納谷香代子

フロアリングにまた新しい傷見つく日ごと

〈我が家〉になつてゆく家(高槻市) 藤本恵理子

「茶の本」も「風姿花伝」も百円だ学生時代の岩波文庫

(高崎市) 小島 文

三歳と七歳の寝息に挟まれて仕事の悩み眠れない夜

(朝霞市) 小峰 拓朗

丸い目の配膳ロボの優しさに夏日の昼のハンバーグ食ふ

(仙台市) 小野寺寿子

熱中症警戒アラートきょうもまたテニスコートは危険な暑さ

(鈴鹿市) 野間 啓司

☆地図帳に「比島」「仏印」「北支」なく碑の戦没地調べが続く

(つくば市) 石上徳千代

単の縁にあぎとを乗せて燕の子つまらなさうに親を待ちをり

(下関市) 内田 恒生

街路樹から湧き上がるやうにマンシヨンの上層階にとどく蟬声

(西宮市) 谷口 澄

【評】第一首、天気予報をうたう珍しい一首。「夕立の顔」という表現に感心した。第二首、親子ともども、それぞれ近所の川で泳ぎをおぼえたのだ。第三首、新築の家に住みはじめた一家の、気分一新しての緊張感が読める。

地球いま軌道をはづれ日に近しわれも蚯蚓も
 乾涸びてをり

(長野県) 千葉 俊彦

推古から始まり女性天皇は十代なりき見よ高市首相

(横浜市) 松村千津子

母はとても手先が器用それなのに断ることがとても不器用

(富山市) 松田 わこ

初代なる女性首相が期待されし女性天皇の途を閉ざせり

(東京都) 北條 忠政

入院の夫に丑の日のうなぎ冷凍室にて退院を待つ

(下野市) 若島 安子

明け切らぬ梅雨空のごと鬱々とイラン合意はまた覆る

(五所川原市) 戸沢大二郎

人の持つスマホが人から奪いいる時間の長さ
 と重さと尊さ

(観音寺市) 篠原 俊則

日本庭園に小学唱歌の聴こえて二世にも響く「朧月夜」は

(アメリカ) ダンバー悦子

冷房のなき札幌の地下鉄のホームに初のスポットクーラー

(札幌市) 田巻 成男

四十人の一生の一瞬かがよへり歌壇の紙面を開くすずしさ

(名古屋市) 山守 美紀

【評】1 首目、地球が太陽に近づいたような錯覚を持つほど猛暑の日々が続くことを嘆く。2 首目、初代の神武天皇から百二十六代の今上天皇までのあいだに、十代の女性天皇が存在した、と。3 首目、不器用に生きる母親のことが大好きな作者。